

イチエフの事故収束作業は進んでいるのか？

－ 第49回SVCF院内集会報告－

行動隊員 中島賢一郎



中島賢一郎氏

2月25日、参議院議員会館B103会議室で、上記標題をテーマに第49回SVCF院内集会が開かれました。講師は東京電力リスクコミュニケーター原口和之氏、原子力損害賠償・廃炉等支援機構山形宏之氏、資源エネルギー庁から加島優氏、伊奈康二氏。行動隊からは25名が参加し、昨年7月10日の第44回院内集会以降のイチエフの事故収束作業の進捗状況を確認し、質疑をかわしました。

東京電力および国からの報告は、イチエフの現状について、事故収束の作業は課題もあり部分的な遅れもあるが全体的には確実に進んでいるという基調でした。ここでは当日展開された質疑のいくつかについて報告します。

(1) 事故収束作業の進捗と避難解除指示の進行は連動しているのか？

→ イチエフの事故収束作業は資源エネルギー庁の所管だが、避難解除は環境省の所管であり、直接には連動していない。

(2) 凍土壁について東電と原子力規制委員会とで見解が分かっているのはなぜか？ また今後どうするのか？

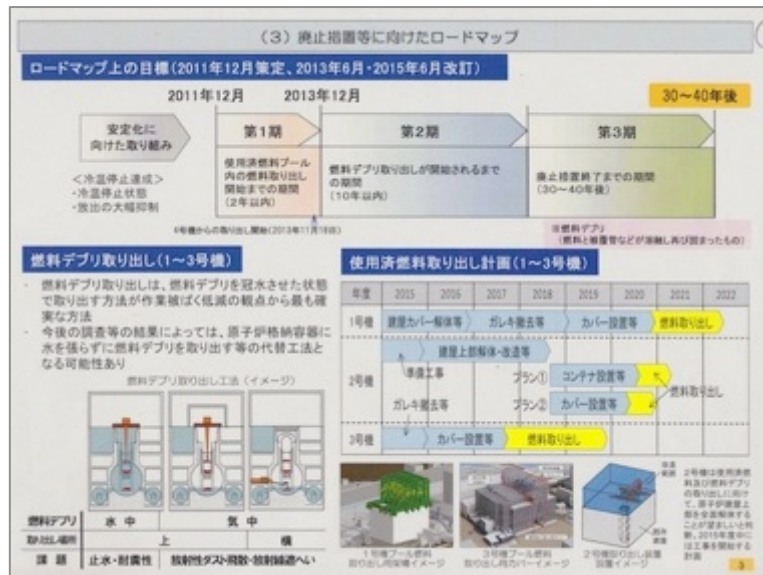
→ 現在、地下水の水位は高濃度の汚染水が溜まっている原子炉建屋の水位より高く保たれており、原子炉建屋の汚染水が直接周囲に流れ出てはいない。規制委員会は、凍土壁の稼働によって地下水の流入が減少し、原子炉建屋の汚染水の水位が周囲の地下水の水位より高くなり(水位の逆転)、建屋から周囲に高濃度の汚染水が流れ出ることを警戒している。

東電や資源エネルギー庁は水位の監視と適宜の対応措置で水位のコントロールが可能であると考えており、規制委員会の理解を求め続けている。

さいわい規制委員会も2月15日に、凍結の順序を陸側から海側を優先させる運用案での凍結開始を大筋で了解してくれたので、3月中にはその案で凍結を開始できると思う。

(3) 汚染水対策は進んでいるというが、使用済み核燃料やの核燃料デブリ取り出しの進捗状況はどうか？

→ これらの作業のリスクが大きいことを改めて認識し直し、昨年「中長期ロードマップ」を改訂し、改訂前の方針と比べて拙速を避け作業全体の安全を重視することとした。





(4) 2014年に規制委員会は原発の重大事故の際の住民避難にSPEEDIを使わないとしたが、今後使用済み核燃料や核燃料デブリの取り出しといったリスクの高い作業が行われてくるとき影響予測をきちんと公表してほしい。どのような方法で影響予測をするのか？

→ 事故後に多数設置されたモニタリングポストのネットワークを使う等、高リスクの作業が始まる時にはきちんと影響評価をするし、その方法についてはきちんと公表していくことになると思う。

(5) 使用済み核燃料や核燃料デブリの取り出し準備に関して、2号機の遅れが目立つ。1・3号機に比べて原子炉建屋内が高線量であることによるのか？ また、使用済み核燃料の取り出し方法の確定、原子炉格納容器内部調査ロボットの投入口とされるX-6ペネトレーションの除染の不調、ミュオン散乱

法による核燃料デブリの所在の絞り込みの中断、ヤード整備における手戻り等の個別の課題はどうしていくのか？

→ 2号機については原子炉建屋内の線量の高さが使用済み核燃料の取り出し方法が未確定であることなど様々な局面に影響している。

X-6ペネトレーションについては高線量の原因個所がレールの隙間部にあることを特定するところまでいった。現在追加の除染方法を検討している。

ミュオン散乱法の導入については装置が2つ居るのでスペースの関係もあり導入を一時停止した。さらにこの方法でなければ核燃料デブリの所在が絞り込めないかどうかという点までさかのぼって検討し直している。

ヤード整備については、2号機周囲の路盤を事故後砂利などで仮舗装したが線量が高く除染が必要。今後の作業で重機を導入するため本格舗装に着手したいところだが、本格舗装後に舗装を剥がして除染をするという手戻りを避けるため、作業の優先順位を検討している。不要な建屋の撤去などの周辺作業は継続している。

この他、参加者からは前日に報道された、東電のメルトダウンの社内基準の忘却等、現在に至っても情報をきちんと公開していないのではないかと批判があり、講師陣からは情報の公開について「信頼できない」と言われることが最大の課題だという感想が漏らされました。

今後イチエフの収束作業が、使用済み核燃料や核燃料デブリの取り出しといった格段にリスクが高かつ専門的な作業に進展していくとき、技術者を中心としたSVCFによるウォッチング活動の充実の必要性を感じさせられた集会でした。

第49回SVCF院内集會に参加して

賛助会員：北原慶昭

福島第一原発の事故収束を目指す団体が月に一度、参議院議員会館で行っている院内集會が、このところとても充実している。小さな会議室を使っただけの勉強会の様相で、まさに車座集會だ。平日の昼間の時間とあって参加者もそう多くないのがなんとももったいないと、そう思わせる内容が続いている。

昨日は、「イチエフ事故収束状況の最新報告」と題して、東京電力のリスクコミュニケーターの原口さん、資源エネルギー庁から加島さん、伊奈さん、原子力損害賠償の監査役山形さんがいらっしゃって、現在の福島第一原発の状況、事故収束の進捗をていねいに説明してくれた。

まずは東電の原口さんからの説明があった。わかりやすい紙資料をもとに、まさに立て板に水の話しぶりで、汚染水処理や廃炉全般について、または福島第一原発で働くひとたちの労働環境までを、40分ほどの時間で一気に話した。そして潔いことにそれ以降の時間、約1時間20分を質疑応答にあて、質問に答えたいとした。

10人ほどの参加者はみな手をあげる。なかには原発や放射線の専門家もいたりするなか、ぼくはごく単純な質問をした。というのも、原口さんの説明があまりにも通り一遍な印象を持ったからだ。

「いまの原口さんの説明をうかがって、つまり汚染水処理も放射線の管理も、そして当初の予定より遅れてはいるものの、廃炉に向けてのロードマップも、すべてが順調に進んでいる



と。つまり『すべてがうまくいっている』のだから『心配することなく、飯館にも双葉にも、浪江や富岡にも帰ってきてください』という理解でほんとうにいいのでしょうか。ぼくは今日ここで聞いたことをこの原発事故を心配している友人や、放射能の影響を危惧しているひとたちに、そのまま伝えたいと思うのですが、彼らに『もう大丈夫だよ。』と自信を持っていいのですか？

原口さんは、それまで合わせていた目をそらしてうつむいた。ちょっといじわるかとも思ったが、正直な気持ちだった。ここに集まっている人たちは、東電や関係省庁をやみくもに責めたてる意思はこれっぽちもない。ただどうしたら事故収束が一番

いい形で進めることができるかを考えているばかりなのである。ぼくの質問に続くように、団体の理事が柔和な口調でうなづいた。「いいことばかりじゃない、ほんとのところを聞きたいのです。もちろんみなさんの立場から言いにくい、あるいは言えないこともあるのはわかります。どうか言える範囲で、みなさんの抱えている『実感』を話してもらえないでしょうか？」

それに対して、「たしかに、課題はあります。」と、原口さん、エネ庁の加島さんが認めたところから、空気が変わった。彼らにとっての「説明会」というルーティンワークとは違ったものになったように思った。

そこから矢継ぎ早に質問が続き、とくに建屋をぐるりと囲んだ「凍土壁」についての議論が掘り下げられた。

ここで報告すると、現在「凍土壁」は完成していて、その稼働をまえに「原子力規制委員会」との議論を重ねているところである。それはエネ庁に言わせると無茶ともいえる難癖を規制委員会から突きつけられているようなもので、それをクリアしないことには、ボタンが押せない状況だということ。そして3月3日に次の会合があり、そこで規制委員会を説得できれば、すぐにも「凍土壁」を稼働したいとのことだった。

さらにその稼働が全方向の稼働ではないことを知っている別の参加者からは、いま予定している海側だけの稼働では思ったような効果が期待できないのではないかという疑義がでた。そしてそれへのエネ庁側の回答は、やや歯切れが悪いものであったといわざるをえなかった。もっと厳しい質問で、「凍土壁」自体が、使えない、まさに大いなる「無駄」になる可能性について問うひともいた。

さらに先日あきらかになった「マニュアル」の問題に関連して、情報の公開、周知についての議論も活発に行われた。ロードマップのこと、これからの作業で危惧される放射性物質の拡散について、さらに住民の帰還にまで話がおよんだころには、閉会予定時間の13時を大きく過ぎていた。

東電の原口さんは事故の半年前まで福島第一で線量管理をしていて、3月11日には本店勤務だったものの、そのあとまた福一に戻ってリスク管理センターで、身を粉にして働いた経歴をもっている。そういった、自らの身体で、あの事故と向

き合ってきたひとならではの、現場感覚に寄りそった説明とことばには、とても好感が持てた。ただやはりいまの仕事、リスクコミュニケーターという立場上からくる、齟齬の感触、噛み合わせの悪さというのはあるのだろうと推測した。

この集会には、福島第一で働いた経験のある作業員の話、東電を辞めて第三の立場から原発事故の収束のために福島でNPOを立ち上げたかた、さらには時の総理大臣菅直人議員も参加して、それこそ元総理を車座に囲んで話が聞けたりする。みなに共通していえるのは、どうにかしてこの未曾有の原発事故を「収束させたい」という気持ちと熱意と行動である。それだけは疑うことなくいえる。

インターネットにあふれる情報は、ぼくにとっては混乱するばかりだ。いったいなにがどうなっているのかを知りたいと思ったときは、なるべく現場に行くのがいいと、そう信じて、でかけていく。ひとと会って、話をきく。そうすると情報がかたちになって、なにかが残る。この日はふとうつむいた原口さんの顔が印象的だった。

原発事故という巨大なモンスターに立ち向かうには、表情のある人間が、信じ合い、力を合わせる事が、なにより大切である。そんな「総がかり」の末席にいるものとして、これからも「自分のこと」として考えたいと思っている。



第5回久之浜慰霊祭「花供養」に参加して

行動隊員：岡本達思

3. 11東日本大震災から5年目の3月を迎え、いわき市久之浜の海岸では6日(日)に、恒例の慰霊祭「花供養」が開催され、大震災以降、除染や放射線モニタリング活動で馴染みの深い福島原発行動隊も、献花を捧げに参加してきました。

去年は工事中だった砂浜の堤防は完成し、その内側にさらに土をかさ上げして造られた堤防のおかげで、久之浜の海岸はかつての風景から一変しましたが、地元の人びとの元気な姿に触れることができ、有意義な1日を過ごすことができました。



＜第50回院内集会のご案内＞

- 日 時：3月24日(木) 11:00-13:00 (10:30から玄関ロビーで入館証配布)
- 会 場：参議院議員会館 (B103会議室)
- 内 容：チェルノブイリ原発およびスリーマイルズ島原発の事故収束状況
- 講 師：国立国会図書館調査及び立法考査局経済産業課

2011年3月の福島第一原発の爆発事故から早5年を迎えましたが、その事故収束作業は前回の院内集会の報告にもあるように、未だ成果を上げるまでに至ってはいません。世界では、スリーマイル島原発事故(1979年3月)とチェルノブイリ原発事故(1986年4月)の2つの原発事故が、大量の放射能をまき散らし大きな話題を呼びましたが、今回の院内集会ではその2つの事故収束活動の経験をもとに、福島第一原発の事故収束作業を考えていきたいと思えます。ついては、それら2つの原発事故の規模や内容および事故収束に至る実態や、現在も続く事故対応等について、国立国会図書館のお力をお借りして比較検証したいと思えます。

＜調査および報告内容＞

- ・事故の内容、規模
⇒事故状況、被害状況、等
- ・事故収束作業の内容、その後の経緯
⇒事故対応組織や体制
労働力供給、労働災害&被ばく
- 事故収束に必要とした関連法制
- 事故収束に費やした費用
- その後の作業要員に対する補償、等



□皆さまの知識と知恵を求めています□

「立法化提言等プロジェクト」および「人材育成プロジェクト」のスタッフ募集中！

福島原発行動隊では、今後の事業の一環として福島第一原発の事故収束作業にシニアが関わる数々の作業の提案や作業の根拠となる法案の検討および提言活動を行うとともに、その具体的な活動の一つとして取り組む人材育成事業のカリキュラム作成やシミュレーション教育の企画や運営に携わるスタッフの募集しています。



くは事故収束作業等のお仕事に従事されてこられた方はもちろん、土木・建築・設計・電気等の分野で指導をされてこられた方、さらには企画や教育関係の分野で、お仕事に携わ

れてきた方のノウハウを特に求めています。

ご協力いただける方は、下記メールまで得意分野のご履歴を添えてご応募ください。

□ご連絡先: Mail = svcf-admin@svcf.jp (担当: 岡本)

□事務局からのお知らせ□

公益社団法人福島原発行動隊の事務局は、右記マップの通り交通至便な場所に位置しています。事務局のメンバーは、毎週木曜日の11時-13時(※)にここで連絡会議を開催し、事務運営の確認や情報交換を行っています。連絡会議は、基本的にオープンで開催していますので、事務局メンバー以外の方も参加できます。お近くにお越しの際は、是非ともお立ち寄りいただきご参加ください。

※院内集会や祝日と重なった日は、変更もありえます。

＜3月-4月の「連絡会議」開催予定＞

- 3月24日(木)※ □3月31日(木) □4月7日(木) □4月14日(木)
- 4月21日(木)※ □4月28日(木) ※院内集会にその会場で開催。

【事務局】東京都千代田区神田淡路町1-21-7 静和ビル 1階A室 Tel:03-3255-5910 Mail:svcf-admin@svcf.jp

